

れない。」との断り書きがあるが、それはな  
お追求されるべき重要な課題であると考えら  
れる。『竹取物語』の天人の扱いに、仏教・道  
教それぞれの影響がみられるることはさまざま  
に論じられてきた。なかでも、道教的な神仙  
思想の投影については、最近の大きな論点の  
ひとつとなっている。渡辺秀男あるいは評者  
などによつて、小南一郎や下出積与などの関  
連諸領域での成果をふまえながら、『竹取物  
語』の思想的な背景としての神仙觀をほりお  
こす作業がつづけられつつある。また、日本  
の道教受容についてさらに探求する、増尾伸  
一郎の一連の考察など、これから『竹取物  
語』研究への指針が示されつあり、評者も  
ふくめて今後なお考るべきことは山積みさ  
れている。

したがつて、本書が『竹取物語』の基本的  
な枠組みを仏教的な輪廻転生の発想と切り分  
けたことは、国文学研究の流れからみても首  
肯される。とともに今後の課題のひとつとし  
て、仏教的な輪廻転生と、道教的な天人流譲  
の思想とが根本的にどのように違い、またど  
のように接しているかを厳密に見きわめてい  
く必要があるだろう。かぐや姫が地上にのこ  
した不死の薬に象徴される、神仙觀の位相は  
したがつて、本書が『竹取物語』の基本的  
な枠組みを仏教的な輪廻転生の発想と切り分  
けたことは、国文学研究の流れからみても首  
肯される。とともに今後の課題のひとつとし  
て、仏教的な輪廻転生と、道教的な天人流譲  
の思想とが根本的にどのように違い、またど  
のように接しているかを厳密に見きわめてい  
く必要があるだろう。かぐや姫が地上にのこ  
した不死の薬に象徴される、神仙觀の位相は

さらに問われねばならないはずである。すで  
に評者も、死を宿命とする地上界の原理との  
対比の相において、『竹取物語』の不死觀を  
みてきたが、本書の論述をふまえることに  
よつても一度この問題を考えなおしていき  
たいと思う。

最終節（II-7）「流譲の思想と日本人」にお  
いて著者は、『竹取物語』が中国から導入し  
た天人流譲の思想が結局日本に根づかなかつ  
た理由について次のように結論づけた。すな  
わち、折口信夫の「まれびと」論などを引き  
ながら、日本の宇宙觀は本質的に水平思考で  
あること。よつて、垂直思考である天人流譲  
とは相容れず、かぐや姫の本来の姿は理解さ  
れることがなかつたのだとする。アマテラス

の解釈についてなど検討の余地はなおりそ  
うだが、『竹取物語』の基本構造をとらえる  
ダイナミックな視座には啓発される。  
さらに本書の注視した流譲の思想の根幹に  
は、「罪」の問題がある。それは『竹取物語』  
がのちの文学史に積み残した大きな難題で  
あった。これについて考えることは、日本文  
化の基層にうずまく罪障意識を解くことにつ  
ながろう。領域をこえた意見交換がより活発  
になされるべきことをも、本書は示して意義  
ぶかい。

（こじま・なおこ／恵泉女学園大学）

大修館書店 二〇六〇円

## 書評 花部英雄著

### 『西行伝承の世界』

川島秀一

著者には『江差の繁次郎話』（青森県昔話  
記録会、一九八〇）や、『扇屋おつる——岩  
手・衣川の昔ばなし——』（みちのく民芸企

画・一九八七）などの、東北地方の世間話や  
昔話集などの貴重な共著（編著）がある。

著者も民俗と文献の中に旅を始めた。

おそらく、この著書は、その旅の途中の時で汗を拭いながら、今まで辿ってきた道を遠望したことによって生まれた書である。著者とともに、峠の一陣の涼風を共有したい。この旅は早足だったかもしれない。十一の論攷はすべて、九〇年代になつて発表されたものである（書き下ろしは四編）。

1 本書の構成と方法

本書の構成は序章を除く二部構成、第一部は「民間伝承の世界」、第二部は「説話伝承の世界」である。第一部では主に、著者自身による採集資料も含めた、聞き取り調査による伝承資料を素材に展開している。第二部では主に説話集などの文献を素材に論じたもので、第二部の後ろに掲げた「西行関係文献資料」も約五十ページほどの手堅い資料集である。本書の末尾にある、西行の「歌、俳句索引」は、第一部の伝承資料と第二部の文献資料を歌や俳句を通して総合したもので、本書の対象の広がりと容量を感じさせる。

著者が「あとがき」で述べているように、本書の方法としては「事績を伝承の論理に引き寄せていく方法、すなわち文芸を享受する側の意識からたどつていく方法」を試み、

「西行伝承を読者である庶民の文芸意識の表出と見る観点」を選んだ。いわゆる「口承文学研究の立場からのアプローチ」であり、「西行伝承には、庶民の文芸の受容の方法と享受の歴史が刻まれていた」という発見が、各論攷を支え、膨らませていった。

## 2 本書の内容

第一部は「民俗語彙サイギョウ」・「職人「サイギョウ」の源流」・「西行と伝説」・「西行と民謡」・「西行と呪歌」の五章である。西行伝承と伝説・民謡・呪歌などの口承文芸との関わりなどを明らかにした三つの論攷は、すべて書き下ろしである。

これらの民間の伝承の水脈を探る理由は、第一回の漂泊者のうちでも、西行ほど口承文芸全体にわたって登場し、しかも笑いを供出する人物はない。庶民における西行とは、いったい何者なのか」という疑問から発して

かつては大工・醤油造り・木挽き・建具師・瓦職人などが各地を渡り歩くときに、自らをなぜかサイギョウと称していたという。それは実態としてのサイギョウであり、歌僧西行と直接に比定される存在ではなかった。多くの庶民にとって歌僧西行を知るのは学校教育を通してであり、「実見したサイギョウによって話の西行も変容をきたすのではないか」という見通し」が立てられる。周囲から「西行」に似ていることから、地囗芸全体に人気が出て、やがて「西行」は歌詞の中から抜け出して、唄い手の立場に移行していくこともあった（「西行と民謡」）。

特に本書で「西行的なるもの」の意味を、特に本書で「西行的なるもの」の意味を、摘している点は重要である。そのことを、巡ってくる宗教者への崇敬を裏返した形の蔑視であるとするならば、彼らが伝える「歌」には、常に文芸的レベルから信仰的機能に変化する可能性があるからである。第一部の到達点は、「庶民の歌に対する認識」であり、

「歌を文芸として目的的に享受する環境はまだ整っていない」時代と世界に光を当たる点である（「西行と呪歌」）。

第二部は「西行説話と女性」・「西行問答譚の展開」・「西行狂歌咄と連歌師」・「西行物盗み譚の周辺」・「西行打擲譚と高野聖」の五章である。

一部では、西行伝承の伝播者として、中世の遊女・連歌師・高野聖などの歴史的存続が想定され、「西行的伝承基盤」といった幅をもつたとらえかた」として把握しようとする。

「西行説話の伝承には宗教者の関与が十分考えられる」ということは、第一部から引きずってきたテーマでもあるが、「歌は旅の方法であっても目的ではなかった」という連歌師も西行咄に投影されていると著者は考える。その地下連歌にも単なる言語文芸ばかりでない信仰的側面が底流にあつたからである。特に「盗みが発覚して斬殺される場面で連歌を詠むことは、神の影向を迎えたことである。

一方には、北面武士であり歌僧でもあった「西行説話」がおり、他方に捉えている点は興味深い（「西行物盗み譚の周辺」）。ここにも、「歌のもつ機能、すなわち神託・納受という面」を見い出せるからであ

たわっているわけである。

第一部と第二部を通じて本書に強く流れているテーマは、西行伝承の伝播者と彼らが保有するウタの機能についてである。

### 3 本書の特徴

本書の構成は、主に聞き書き資料を中心とする「民間伝承」の第一部と、文献中心の「説話伝承」である第二部とに形式上は分かれている。しかし、それらは單なる腑分けでもなければ、逆に区別することによって図ろうとする両者の癒着でもない。民間伝承と説話伝承とを同じ平面で論じているというよ

りは、両者を糾う縄のように、微妙にクロスさせているところが魅力である。それは、民衆は「西行の伝説は聞いていたが、かつてこの地を「サイギョウ」と呼ばれる職人たちが横行していたとは知らなかつた。話を聞き

た。

著者は埼玉県都幾川村で初めてサイギョウという事実に出会つた。このときのことを著

者は「西行の伝説は聞いていたが、かつてこの地を「サイギョウ」と呼ばれる職人たちが横行していたとは知らなかつた。話を聞きながら心臓がドキドキしたことを覚えてい

た。

付けた著者の方法に対する確信と、それを「世界」と名付けた目配りの広さによるものである。

一方には、北面武士であり歌僧でもあった「西行伝承」に気を付けてみたら、宮城県にもサイギョウの伝承があつた。宮城県の氣

仙沼市では、木挽き唄として「ハアー向こうにチラチラ見えるはあれはサイギョウさんで

た。

### 4 本書が開く可能性

この二つの事実の間に「西行伝承の世界」が横

の詞承が伝わっており、歌っている木挽きさんは、サイギョウのことを木挽きだと伝えている。

一方では、サイギョウとはカバネヤミ（怠け者）のような存在で、仕事の無いようなどに、稼ぎ場に行って仕事を貰い、少し挽くまねをしたというから、これも大工か木挽きのことであろう。道具作りも教えていたと

いうから、必ずしも排除されるだけの存在ではなかつたらしい。

サイギョウモドシというツヅジの花は、昔、

西行が家に戻つてトンボという名を付けたものだといふ。何か背景に一つの西行問答譚があつたような気配がする。

サイギョウという実態的な存在が歌僧西行をどのように変容させてきたのか、これは今後も多くの事例を重ねながら、具体的に検討していくかなければならない課題であろう。また、西行問答譚における歌の掛け合いは他の弘法伝説などには少なく、歌を詠む「西行伝承」の特徴であるが、本書序章に述べられているような、折口信夫の「まれびと」論における「神」（西行）と「精靈」（土地の女や子供）という図式がどれだけ有効性を持ち得るかも、今後の「西行伝承」研究の課題となる。

成り得るだろう。

ウタという日本の口承文芸が、生活の中で

らせていくことが、いかに困難な努力が必要であるかも、行間から伝わってくる。

どのような意味や機能を持ち、それが文芸へと変化し、あるいは逆に文芸から生活の中へと生かされてきたか、本書はそのようなことを考へるにふさわしい。さらに、その素材となつた「民間伝承」と「説話伝承」とを関わ

著者の「西行伝承」の旅は、今後も多く

峠を越え続けていくだろうことに、声援を惜しまない。

岩田書店 六〇七七円

（かわしま・しゅういち／気仙沼市史編纂室）

## 末次智著

### 『琉球の王権と神話』

#### ——『おもうさうし』の研究——

山 下 欣 一

沖縄の誇る『おもうさうし』の研究は、常に沖縄研究の中心的な座標を占める研究課題でありつづけて現在に至つてゐる。思い起こせば、その一生を『おもうさらし』の研究に捧げた伊波普猷、そして、伊波普猷が終生、恩師として、その学恩を敬慕した田島利三郎などの先駆的な研究が一里塚としてあつた。その後、多くの研究者たちの嘗々たる歩みが継続され、『おもうさうし』のテキストとしての確定、註釈作業が進展することになる。

このような現状に一石を投じた谷川健一『南島文学発生論——呪謡の世界』（思潮社）の大冊があり、刺戟と啓発を受けたのも記憶に新しいところであるが、また、われわれはここに末次智（四条畷女子短大）の『琉球の王権と神話——『おもうさうし』の